

童

2014年7月24日。

マイマイガの毛虫や蛾から何とか開放され、いよいよ蝉が鳴く夏がやってきました。毛虫のせいで、葉っぱをたくさん失ってしまった樹木（からまつや桜）も、その生命力のお蔭で、再び緑を取り戻し、がんばって緑の葉っぱを揺らし、木陰を作ってくれました。マイマイガは既に卵を産み付けています。来年は、手遅れにならないように、早めに対策をうたなければなりません。以前では考えられないような生態系の変化です。自然環境の変化は、確実に訪れており、常にその変化に応じた暮らしを考えて対応していかなければならない時代です。

そのためには、自立的で創造的な思考力が必要となる時代です。それには、シュタイナー教育の示すように、幼児期 児童期 青年期にそれぞれの課題 意志(身体・感謝) 感情(心・愛) 思考(精神・義務)を確実にクリアしていけるような環境を整えていきましょう。幼児期はとにかく、**わがままな意志(好きなことをさせる)を育てるのではなく、大人の模倣として人間としての道をやらせたり、メルヘンとファンタジー体験を一緒にたっぷり楽しみましょう。**

いよいよ夏休み。リズムのある生活を中心に、原体験としての遊びや絵本やお話をたっぷりしたり（お話を覚えるのも素敵ですよ）、沢山の野菜で料理したり、子どもと共に過ごすことはたくさんあります。海や山へわざわざ行かなくても、子ども達は、身近な場所で創造的に遊ぶことができます。鼻見城址の子どもたちと整備した4本の遊歩道も、ぜひ行ってみてください。但し、早朝は5時半から6時半ごろまでは、自転車が通るので危険です！！？



【大地そらさん新道】

雄飛が4月頃からマウンテンバイクに乗り始め、鼻見城址へ夕方走りに行くようになった。そして、生き生きとしてとても面白かったと伝えてくれ、地図まで作り説明してくれた。子どもたちと歩く道以外にも道があるらしかった。

当初、それほど興味もなかったが、あまりにも面白いと言うので、元来の何でもやってみたい性格上、中古の自転車を手に入れ、先日一緒に走ってみた。成程、山道を走る下る爽快さ、豪快さ、緊張感はず者ではなかったが、それ以上に、ひたすら汗をかきながら登る、そして待望の頂上、そして下る。再び登る。まさに山登りの快感であり、更に人生そのものようであった。毎朝5時半の朝のエネルギーと静寂と空気の引き締まった中を登るのであるが、この歯を食いしばりひたすら自分と闘い、葛藤しながらの登りは、1日の始まりとして、生きている実感を味わえる。

そんな中で、あちこちに廃道があることがわかった。廃道とは、先人が歩いた道で、現在使われなくなり、獣道のようにわずかな踏み跡しかなく、草や倒木や雑木に覆われている道である。雄飛が2ヵ月ほど前、冗談半分でこの山を管理している小さい頃野球でお世話になった方（現在 副町長）に、「草刈をして自分で綺麗に道を作って走りたいのですが」と話したということを知り、これは面白そうだと思い、正式にこちらの意向を伝えにいった。すると、すぐに役場からファックスがあり、地元の人達がもう手を入れる事をしない（エネルギーがない）里山を若者たちが綺麗にしてくれることを感嘆して喜んでおり（地元住民が）、ぜひお願いしたい、そして使ってほしいという文章が届いた。

先人の残した道を切り開く、再び美しくする、藪藪の場所に道を作る、そしてそれらを繋げる、まさに、子どもたちが砂場で道を作る、ホールで迷路や家や町を作る という遊びを、そのまま山全体でできるという豪快なロマン、ファンタジーを楽しむことができるのである。

その日にすぐに、チェーンソー2台、刈払機2台、そしてスタッフ3名 そらさんを連れて開拓部隊が出かけた。倒木を切り倒し、藪を払い、最後に子どもたちが切り倒された樹木を片付けてくる。ゆっくりなので、子どもたちは歌ったり遊んだりしながら後からついてくる。その通った跡は、しっかりと道ができてきている。こうして、初日には、1本の道が開通した。

翌日、今度の道は手ごわそうだったので、早朝に下見に出かけた。直径30センチ以上の倒木が多数道に覆いかぶさり、かなり手ごわそうであった。チェーンソーを入れてみたが、案の定挟まってしまい、そのままにして帰って来た。やはり専門家が必要かと思ったが、ここは、やはり子どもたちに大人のすごさを見せるチャンスだと思い、10時過ぎ、子ども達を乗せた軽トラが現地へスタートした。そらさんは、毎日軽トラに乗れることを喜んでた。

この道は薄暗く、まさに魔女の森のようで倒木が道をふさいでいた。通せんぼしている倒木に大型チェーンソーを入れ、丸太にして片付けながら進む。早朝の挟まっているチェーンソーも無事引き抜くことができ、草を刈りながら、倒木を切り刻みながら進む。登り道なので、歩くだけで汗が噴き出るが、チェーンソーと草刈を同時にしていくので、更に汗がこぼれる。まさに開墾、開拓である。でも考えてみれば、これほどロマンの溢れることはない。山に自分たちの道を作っているのだから。それも後世に残るトレッキング用の道ののだから。この2本目の道も、とうとう倒木を片付け、開通した。

正直、この2本目、もともとあった登山道を含めると3本の道が、鼻見城址の頂上から下る道が出来上がった。もちろん、開通した翌朝には、感激して試走してみた。もうこれで十分と思ったが、でも、もう1本気になっている道があり、そこはわずかな踏み跡しかなく、雄飛は途中まで行ったが、あまりの藪にあきらめたい。これこそ、本物の新道開拓だと思い、ちょうど、雄河もいたので、精鋭部隊を組み、再び挑戦した。入り口の立つだけで、どこからどう行けばいいのという雰囲気であった。わずかな踏み跡と直感を信じて、チェーンソーを持ち先陣をきった。途中から藪が激しくなったので、刈払機で無我夢中で切り開いていった。直登に近い開墾を続け、もうあきらめた頃、3日前に開拓した道に出ることができた。そこは祠が一つある頂上であった。この祠の導きであることに感謝して、荒れ果てたたぶん数十年手を入れてもらっていない祠周辺の草を刈り、綺麗にした。そこへ、第2陣、第3陣、そして子どもたちが到着した。それはそれは感動した。

翌週、全員で、鼻見城址へ出かけた。登り下りルートは、それぞれ自分たちで開拓したルートを使った。たぶん、このルートを使う50年ぶり位の登山者ではなかろうか。子ども達は「ここはこうした」「ここで石を片付けた」「ここで木を切り倒した」等、口々に言っていた。ここ鼻見城址には、大地の子どもたちの新道が連なっている。まさに、道を開いた先人として語り継がれることだろう。子どもたちが歩く、道は更に踏まれて道らしくなっている。子ども達は、子どもながら、次の世代に大きな財産を残した。そしてこんなチャンスを頂けた事に感謝したい。きっと、大きくなった時に、感じることもあるだろう。余談だが、牟礼や三水の小学校1、2年生は遠足でこの鼻見城址によく来ていた。もし、ここに来ることがあったら、ぜひ「大地そらさん新道」を歩いてほしい。

「道は、最初からあるものではなく、まずたった一人が、皆と違う所を歩いたことから始まる」「そこを一人また一人歩き、道になっていく」。人に流されるのではなく、たった一人でもいいから、自分で楽しい、面白い、正しい、うれしいと思うことを、まず自分で初めて欲しい。それは、いつか道なるだろう。「はじめの一步」の勇氣。